

日本語は幸いにも膠着性を保つ

屈折語は優れている？

『日本語構造伝達文法・発展D』に、私は「格表示は名詞と動詞の間でなされる」と題する論文を書いた。その一部にこのような趣旨のことを書いた。

ラテン語では、*dominus* (主人) と言えば、この語末の *us* で、主格・男性・単数であること、つまり、3要素を一挙に示せてしまう。これは屈折語の特徴である。これが屈折語の優越性とみなされることがあった。

論文ではそのあと次のように続けた。ラテン語は名詞後部に情報を盛り込みすぎたために、名詞後部が複雑になってしまった。そのため、動詞を、紀元前後ごろに、名詞の前に出し、名詞と動詞の間に創出した前置詞に、名詞後部の格情報を移した。名詞後部は単純化した。もし、ラテン語のような屈折語がほんとうに優れているのなら、なぜ、このようにしてこの特徴を消す必要があったのか。

格以外の要素は？

論文では触れられなかったが、名詞後部にあった他の要素、性と数であるが、この情報は冠詞と、より単純な複数形を作って表示することになった。(これを言うためには、もう少し調査と考察が必要である。)

ロシア語の不徹底

論文ではロシア語にも触れた。ロシア語は、先進国イタリアのラテン語同様、前置詞を持つようになったが、名詞後部の格の要素も残した。イタリアほど改革が徹底していなかったわけで、逆に言語がいつそう複雑になってしまった。改革が徹底しなかったのは、先進国の表面的なまねに終わったためではないか。

言語として優れているとはどういうことか

言語として優れているとはどういうことか。論文から分かることは、単純であることである。言語はひとたび複雑化すれば、単純な形に戻そうとする。その戻し方は、ラテン語の場合、動詞を名詞のまえに出し、動詞と名詞の間に創出した前置詞に格を移すことによって、複雑化した名詞後部を単純化することだった。

日本語は幸いにも膠着性を保つ

日本語は幸い膠着性を保っており、文法的要素を名詞のあとに順次付けたしていく。このような膠着語の特徴は、文法要素の透明性が高く、文法構成が分かりやすいということである。これが人類の元来の言語の姿であった。印欧語も元は膠着語であった。

日本語は膠着性を保っており、単純化することこそあれ複雑化はしていない。だから、印欧語のような語順を変えるほどの改革は、まったく必要がなかった。